



ボランティアと指導するフォーラム、伊達市が別途契約している業者の方々。

放射性物質の除染をボランティアが支援

コープふくしま

東京電力福島第一原子力発電所で発生した事故により、福島県内各地で放射性物質汚染が発生している。これに対し、県や市は居住地域を中心に汚染物質の除染活動を始めているが、コープふくしまは、この活動をサポートするボランティアの参加を呼び掛け、その窓口を担う形で協力している。

**ボランティアの窓口となり
現状を訴える**

福島県内各地で発生している放射性物質汚染への対応は、本来、国の主導でやるべきものだが、現状としてそれは行なわれていない。そこでコープふくしまは、除染活動を支援するボランティア活動に積極的に取り組んでいる。

コープふくしまが除染活動に協力することになったのは、県内での除染活動の実施を検討していたNPO法人放射線安全フォーラム副理事長の田中俊一さん（前内閣府原子力委員会委員長代理）が、自治体側に実施許可を得ようと動いていた際、地域とつながりの深いコープふくしまが、自治体の担当者らとの間をつないだのがきっかけだ。田中さんらによる除染活動は、初め飯館村長泥地区で実施され、マスコミにより大きく報道されたが、コープふくしまは同地区での除染実施にも協力していた。

現在、田中俊一さんは、福島県伊達市と「除染アドバイザー契約」を結び、市内各所の除染活動に取り組み始めている。コープふくしまはこの動きと連携してボランティアを募集し、可能な日については現場へ同行もしている。

**できるだけ薄く、
汚染された土だけを削る**

7月16～17日の同市内富成小学校の



排水槽は極端に高い放射線量が検出される場所。

除染活動からボランティアの参加は始まり、23～24日には同市霊山町下小国の住宅地で実施。その模様取材した。

朝9時、各地から訪れたボランティア参加者が集合場所に集うと、田中俊一さん、ボランティアへの指導役を務める日本原子力研究開発機構の吉田善行さんがあいさつと作業の説明を行なう。

この日の作業は、地域の人の生活道路の路肩数百メートルの表土を削り取り回収するというもの。

どれくらいの土を削ればいいのか、削ると放射線量はどのように変化するのかについて、吉田さんが参加者に説明する。厚さにして2cmほどシヤベルなどで土を削り、その後で放射線量の変化を見ると、真下からの放射線は7,000cpmから800～500cpmと10分の1程度にまで

※ count per minute：表面汚染測定器で用いられる、1分間当たりの放射線の数。



表土の削り方が説明される。



表土を削り取った場所の放射線量を計る。



銀色の部分がセンサー。上下左右からの放射線量が計測される。草木や、アスファルト部分の細かな凹凸に入り込んで除去できない物質などが発する放射線にも反応する。センサーを持つのが日本原子力研究開発機構の吉田善行さん。



ボランティア参加者が、吾に路肩の表土を削っていく（写真右）。水を流し、土ぼこりを防ぎながら排水溝も除染した（写真左）。



低下。放射性物質の多くは表土に堆積していることがよく分かる。削り取った土は、ビニール袋に入れて運搬用の1トンバッグに運ぶよう指示される。

一通りの説明が終わると、参加者はそれぞれ路肩に散らばって作業を開始。除染、という意識で作業すると、少しでも厚く土を削り取りたくなるが、除去する土を廃棄する場所の確保という問題上、「できるだけ薄く、汚染された土だけを効率よく削る」という意識が必要との説明がされた。

除去した土の廃棄場所は難しい問題で、市としての動きでは対応に限界がある。県や国が除染に本腰を入れ始めれば、こうした問題も解決につながっていく可能性があると言えそう。

除染作業は地道な継続が重要

10時頃から始まった作業は各自休憩を挟みながら、昼まで続く。線量計で各所の放射線値を計る吉田さんに、ボランティア参加者はいろいろな質問を投げ掛け、吉田さんも、ボランティアの仕組みをより安全で効率的なものにしていくためのヒアリングを細かく行なっていた。

ボランティアは、福島県内に限らず、宮城、東京、栃木、茨城などさまざまなか場所から参加している。「家族が福島県出身」「他のボランティアで福島を訪れ、現状を知り除染にも関わることにした」「原子力関係の仕事をしており、責任感から」「実情を知りたかった」な

ど、動機もさまざま。その多くはインターネット上のニュースサイト、TwitterやFacebookといったSNS経由でこのボランティアを知ったそうで、その影響力の大きさを感ずる。

1時間ほどの昼休みを挟み、午後3時前まで作業は続いた。予定していた範囲の除染が完了し、最後に吉田さん、コープふくしま・野中俊吉専務理事によるあいさつ、伊達市役所市民生活部次長はんざわたかひろ半澤隆宏さんらより感謝の言葉で締められ、この日の除染作業は終了した。

吉田さんによれば、作業した空間の放射線量は3マイクログラムから2.5マイクログラムに下がった（20%弱の低減）、路肩の表面が発する放射線は10分の1程度になった。除染活動は地道にや



除去した土は1トンバッグに集められ、トラックで運搬される。



住宅のアスファルト部分の除染は伊達市が別途契約した業者が実施。縦についている筋はアスファルトを削り取った際にできたもの。



路肩から畑に入る小道の放射線量を計ると高い値。路肩よりも低いため、雨水と一緒に放射性物質が流れ込んだことが予想できるのだとか。

れば少しずつ線量が下がるという実感と同時に、かつての環境を取り戻すことへの長期的な活動の必要性も感じた。

今の福島を、見に来てほしい

ボランティアへの登録は、コープふくしまのウェブサイトで可能。登録すると除染活動の実施予定などがメールで送られる。

てくるので、返信メールで参加申請ができる。作業を通じ復興支援に協力したいという人はもちろん、放射能について専門家に聞いてみたいことがある人にとっても貴重な機会となる。

田中俊一さんは、福島県ともアドバイザリー契約を結び、今後、除染作業は全県単位で行なわれることが予想されている。「理想を言えば、除染は事業として

行なわれるべき」という意見もあるが、ボランティアによる継続的な活動が、自治体の動きを促すことにもつながれば——という思いは皆が強く持っている。

「作業を手伝っていただくことはもちろんですが、来てくださる全国の方に、福島の現在を自らの目で見ていただく機会になれば、とも思っています」と最後に野中専務は話してくれた。

作業終了後、今回の成果について吉田さんが話す。ボランティア参加者からは活発に質問が飛んだ。



今後、県内全域に広がっていく 除染ボランティアの 長期的取り組みに、 ぜひ参加してください

コープふくしま 専務理事 野中俊吉さん

地道な作業で、少しずつしか線量は下がらない。でも、やればやっただけの成果は出るし、無駄になることは決してない。それが除染活動です。

コープふくしまでは、4月から放射能について学ぶ勉強会を実施しています。簡易携帯型線量計の販売やガラスバッジ(個人被ばく線量計)を使った測定サービスを提供するなどして、組合員と共に、正しい認識を広めることに努めてきました。今回、除染ボランティアを組織することへの協力は、その延長線上にあるものです。

現在は伊達市の除染が対象のボランティアですが、除染作業のマニュアル化も進んでいるので、今後は県内に広がっていくと思います。多くの方にボランティア登録していただき、長期的な取り組みに協力していただけると嬉しいです。(談)